

2010年3月修了

新領域創成科学研究科 国際協力学専攻

琉球の御嶽にみる「至高性」の研究

～現代社会への示唆～

大泉泰（学籍番号 47 - 076867）

指導教員：吉田恒昭教授

キーワード：琉球、沖縄、御嶽、至高性、おもろさうし、バタイユ

1. 研究の背景・目的

沖縄には昔から御嶽(うたき)という聖域が森の中や洞窟、崖の上などの様々な場所にあり、今日でも人々の暮らしの中に自然に、御嶽の存在は溶け込んでいるように思われる。このような御嶽には多くの場合、小さな祠や香炉や石があるだけでそれ以外には特に目立った神々しさを感じさせる物体はない。本研究はこのような御嶽において、そこを神聖な場所とする人たちがどのような感覚で御嶽に意味を見出し、大切に扱ったのかについての考察を試みるものである。研究の対象としては、琉球王国以前の時代に生きた人々を主に想定している。

2. 本研究の問い

琉球王国以前の時代に御嶽を神聖な場所とした人々は、特に目立った物体がない御嶽の場所にどのような感覚で意味を見出し、そこを大切にしていたのだろうか。

3. 仮説の設定

御嶽のことについての研究はこれまで沖縄内外の多くの研究者によって調べられてきたが、それは御嶽と神との宗教学的な関係についてや、御嶽と琉球の人々の死の感覚についての民俗学的論考、御嶽の空間についての建築学的視点からの論考など様々である。このような中で本研究では御嶽の場を大切に琉球の人々の感覚を把握するための新たな一つの仮説、あるいは視点

として、ジョルジュ・バタイユの「至高性」の概念を提示している。「至高性」とは簡単に言えば「～のために」や、「～だから」といったかたちで理由付けされずに、行為や存在や関係性それ自体がもつ価値や意味を享受することであり、同時に、至高な領域の生を生きる人間を、我をも忘れるような世界の森羅万象との連続した感覚に導くものでもある。

4. 仮説の検証方法

この仮説を検証する方法としては、主にバタイユが「至高性」を見出している死と宗教の視点から、既存の御嶽研究を捉えなおすことと、琉球王国時代に各地の「オモロ」と呼ばれる歌を集めて編纂された沖縄最古の神歌集である『おもろさうし』の歌の分析を試みている。



写真：斎場御嶽の祭壇（2009年筆者撮影）

5. 仮説の検証結果

バタイユの至高性の視点から、死と御嶽の関係と御嶽信仰をささえる宗教性のそれぞれについて、既存研究と『おもろさうし』を材料に分析を試みたところ、次のような結果が得られた（下表も参照のこと）。

まず、死と御嶽の関係については、御嶽は元々死者の風葬を行なう場所であり、人々に死を想起させる空間であった。そして琉球において人が死ぬとその魂は万物の根源地であるニライカナイという「あの世」へと還っていくと考えられていた。この様なことから御嶽の場における死のイメージに関わる感覚は万物の生死の連鎖の中へと自らが誘われ、あらゆる存在と連続する至高な感覚へと近づいていく経験でもあることがわかった。

次に御嶽信仰を支える宗教性についての考察として、琉球において宗教的な指導者である王や豪族が存在し、それらが御嶽から遥拝する太陽神と同一化されている意味について考えた。そして御嶽信仰において王や豪族などの太陽と同一視された至高な存在を抱く理由として、普段は至高性とは離れて暮らしている人々が、こうした至高者の存在を通して、世界とつながりあう感覚を享受することが出来たのではないかとすることを提示した。

表 御嶽信仰の位置付け

		既存研究	本研究（至高性の視点）
御嶽信仰	死	風葬を行なう場。 「あの世」であるニライカナイへと死者の魂を弔う場。	死者の霊を通じて人々の感覚が万物の根の国であるニライカナイへとつながっていく場。我をも忘れて神と和合し、万物の連続性の中へ自らが誘われる場。
	宗教性	御嶽を通じて太陽神から生命力や霊力を感じる。 豊穰祈願として太陽神と王や按司を同一視して拝む。	生産的な仕事や道具の使用などを行わず太陽と同一視された至高な存在を仰ぎみる事で、普段は不連続な存在である人々が世界と連続した至高な瞬間を享受する。

これらの考察と分析を試みたかぎりでは、御嶽の空間は、バタイユが言うような至高な感覚・経験を人々に抱かせる場所であったのではないかと考えられる。つまり、信仰の場である御嶽の空間を通じて、人々は個としての自分の存在が万物の存在の連鎖の中に位置づけられること、ただ自分がそうしてこの世界に存在していることそれ自体の意味と感覚を享受していたのではないかということがわかった。

6. 現代社会への示唆

琉球の人々が御嶽の空間に見出していた至高な感覚、自分の存在が世界の森羅万象と関係し連続している感覚、他の何もののためでもない、それ自体を享受するような生の感覚は、現代社会に生きる私たちも日々の些細な出会いや出来事の中で経験しているものである。こうした日々の些細な生の意味や喜びを尊ぶことがグローバル化や資本主義社会の抱える問題を解決する力と可能性を持っているのではないだろうか。

7. 参考文献

- Georges BATAILLE: LA SOUVERAINETÉ, 1976 湯浅博雄、中地義和、酒井健訳『至高性』1990 人文書院
- 外間守善校注『おもろさうし（上・下）』2000 岩波文庫 など